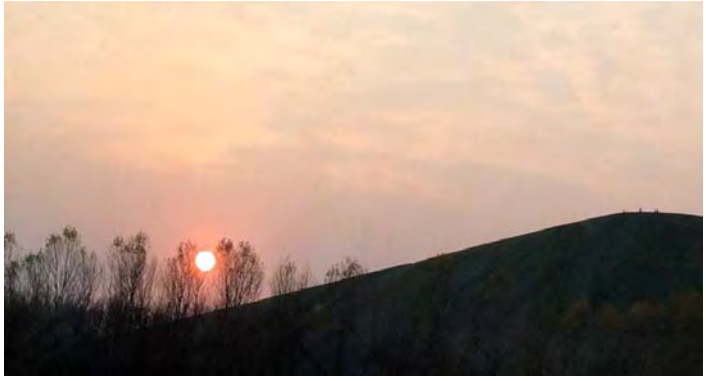
2017.12.5
No.204

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間1,000円）

身近な自然を再発見！



１ヶ月半、さまざまな事情で市民運動に関わることが出来ませんでした。辛さを慰めてくれたのが身近にある豊かな自然でした。懸命に囀るスズメにさえ感動しました。
「鳥の魂は空で、空の身体は鳥だ」岩多慶治「折々のことば」が心に響きました。写真は１０月から１１月の「身近な自然再発見」
左上から時計回りに宮島沼のマガン、モエレ沼の夕日、大通公園の新雪、自宅近くのスズメ、自宅庭のアカゲラ、中島公園の紅葉
撮影・Ｍｉｎａｋｏ

ファクトチェックを広めよう
楊井人文弁護士が講演

１１月２２日に「植村裁判を支える会」の報告集会があり、植村さんの記事を捏造と決めつけた背景に迫る「フェイクニュース問題とは何か」を楊井人文弁護士(日本報道検証機構代表)が講演しました。（会場は教育文化会館）

フェイクニュースとはうそのニュース、でっちあげという意味ですがトランプ米大統領が使っています。

楊井さんは、新聞などが間違った記事を書いても、日本ではなかなか訂正されない。ニューヨークタイムズの訂正欄はいちばん目立つページにあり、毎日１０本程度の詳しい訂正記事が載っていると発言しました。楊井さんは５年前に、誤報を点検し、どのくらい訂正されているかを誰でもが確認出来るようにウェブにサイトＧｏＨｏｏ（ゴフー）を立ち上げました。世界を見ると欧米、アフリカ、アジアにファクトチエックが進んでいて、現在１３６以上のサイトがあると言われている。ファクトチェックとは「言説の真偽検証」だ。政治家など公人の発言やメディアの報道、インターネット上の言説など、社会に大きな影響を与えるあらゆる情報が対象となる。意見や論評が正しいかどうかではなく、もっぱら事実の正確性を検証することに主眼をおく。ファクトチェックには人とお金も必要だが、まずネットワーク作りが必要だ。ことし7月、スペイン・マドリッドでファクトチェック国際会議が開かれ、４０カ国以上から約１８０人が参加。この会議は、２０１５年に発足した国際ファクトチェックネットワーク（ＩＦＣＮ）が主催している。楊井さんも参加し、印象に残ったのは女性が多いということ。既存のメディアが男性支配であることの反映だろうかと述べました。韓国では今年３月にソウル大学にファクトチェックセンターが開設され、大手新聞や公共放送１６社が活動に共同参加している。（現在は２２メディアに拡大）。ファクトチェックの取り組みは先進国では日本がいちばん遅れているが、６月にファクトチェックイニシアティブ（ＦＩＪ）を設立したと述べました。

植村さんのことにも触れ、ジャーナリズムでは記事を捏造すれば一発退場だ。ファクトチェックせずして、偽ニュースを語るなかれと警鐘を鳴らしました。ファクトチェックの必要性が理解でき、このような検証が社会を変えていくのだと感銘を受けました。

一人ひとりを大切にする教育
前川喜平さんが講演

前川喜平さんと２人による
パネルディスカッション
撮影：石井一弘さん

１０月２３日、加計学園問題で、官邸の関与を証言した前文部科学事務次官の前川喜平さんが札幌で講演し、７８０人の市民が耳を傾けました。

演題は「教育を語る」です。前川さんは「学習権は全ての基本的人権の根底にあり、学びによって人間の尊厳を確保できる」と教育観を語りました。

まず初めに１９４７年に制定された旧教育基本法（２００６年現行教育基本法に改正）の前文「われらは、さきに日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである」を紹介し、「憲法と教育は密接な関係がある。憲法の理念である個人の尊厳が最も大事であり、一人ひとりが、かけがえのない存在であり、自由で自律的な生き方が尊重されなければならない」と述べました。

「国家権力は憲法に従わなければならないのに、立憲主義がないがしろにされている」と批判しました。また「憲法の理念に反して個人より国家を重んじる、戦前の国体思想の考え方が復活してきている」と懸念をしめしました。

文科省が今の道徳教育を２０１８年度から小学校で、２０１９年度から中学校で検定教科書使用の「特別な教科」に変えることに、「内心の自由に踏み込む危険性がある」と述べたうえで「考え議論する道徳をめざす」を逆手にとって「どういう社会を作っていくのか」とか「ヨーロッパで普及しているＥＳＤ（持続可能な社会づくりのための教育）を取り入れてはどうか」と提言しました。

前川さんは安保法制で集団的自衛権行使が認められたことに触れ「素晴らしい理想が掲げられている憲法９条をないがしろにした理想のない現実主義だ」と批判しました。

前川さんは官僚でしたが、「内心の自由は売りわたしたりはしない」という信念で生きてきたと述べました。

自由に語ることが難しくなっている社会で，何を大切にしたらいいのか、自分らしく生きる勇気をもらいました。

本 BooKs

マーシャの日記

マーシャ・ロリニカイテ著
清水陽子訳　新日本出版社
２３７６円

マーシャは、１９２７年にリトアニアに生まれたユダヤ人。１９４１年、ナチス・ドイツ侵攻後に始まったユダヤ人狩りで、わずか半年の間にほぼ１０万人が銃殺されました。父はナチスドイツと戦い、母と幼い弟妹は、ゲットー閉鎖の時に大勢の人たちと共に射殺されました。ラトヴィアの強制収容所に入れられたマーシャは奇跡的に生きのびました。

本書は１４歳から１７歳までの非人間的で過酷な迫害の中で、その様子をつぶさに日記に書き続けた記録です。聡明なマーシャは「もし生き残ったら自分で話そう。そうでなかったら、これを読んでもらおう。とにかく知らせなければ」と冒頭に記します。

マーシャは、感性豊かで、収容所で何が行われていたかを観察しメモを書き続けます。鉛筆がない時は記憶術を使ったというのですから、その冷静さにも驚かされました。メモは靴のつま先などに隠しました。鉛筆を手に入れるため収容所の仲間に協力も頼みます。

小さな喜びも記します。「私にも幸運がめぐってきた。針を見つけたのだ！本物のちゃんとした針！護送兵に殴られたけど、平気。針が拾えたのだもの。少なくとも服をちゃんと繕える」囚人には名前がないことも記録。「囚人No5007が木靴を一足受領と記録される。ここでは姓も名前もなく、あるのは番号だけ」「この世には、収容所と作業と空腹とそしてものすごい寒さ以外には存在しないような気がする」と書きます。

何度も死の恐怖と闘いながら難を逃れますが、砲撃で気を失います。「ドイツ軍は逃げたぞ」とソ連兵に声をかけられてようやく生還しました。

人間をここまで蹂躙し、命を奪い取るファシズムを少女の目で告発しています。戦争の愚かさと差別、選別したナチスの残忍さに胸がえぐられました。その後、マーシャは作家となり、優れた作品を残しました。

今、また戦争の足音がひたひたと押し寄せてくるのを感じます。特に若い世代の方に是非読んでいただきたいです。

海をわたる手紙

澤地久枝・ドウス昌代著
岩波書店　１８３６円

「妻たちの二・二六事件」「密約」などの著書があり、「九条の会」呼びかけ人のひとりでもある澤地久枝と、２０代で渡米し「東京ローズ」から「イサム・ノグチ」まで，一貫して日米にまたがる歴史を描いてきたドウス昌代の１４通の往復書簡です。

二人に共通するのは、徹底的な取材と調査です。気の遠くなるような膨大な資料を探しコピーのない時代には、手書きで書き写しました。

読んだ中で、記憶に新しいのはドウス昌代の「イサム・ノグチ」です。松井久子監督の「レオニー」を観て本を読んだのですが、その８４年に及ぶ足跡の一歩一歩を丁寧に掘り起こし、書き込んで行った作家の力量に圧倒されました。

澤地久枝の「九条の会」呼びかけ人として安保法案を阻止しようと集まった、国会前の熱気を伝える手紙は、臨場感あふれます。

ドウス昌代はアメリカでの日系移民に対する差別的な政策を、長い間、資料室に眠っていた文書から掘り起こしています。

ドウス昌代より８歳上の澤地久枝は、編集者からノンフィクション作家としての地歩を築いた方です。本書は書簡という形で、過去から現在に至る日米の歴史を浮かび上がらせています。

戦争を問い続けている二人の真摯な生き方に背筋が伸びました。読んでいない本を是非読みたいと思いました。

銀河鉄道の父

門井慶喜著　講談社
１７２８円

「銀河鉄道の夜」「注文の多い料理店」「風の又三郎」などの童話や「春と修羅」などの詩で知られる、宮沢賢治。でも、その生涯は決して長くはありませんでした。

本書は波乱万丈の賢治の生涯を、父、政次郎の視点にたって描いた作品です。

岩手県花巻で、祖父の代から質屋を営む宮沢家は、何不自由ない裕福な家庭です。政次郎も素晴らしい成績を収めますが父親から「質屋に学問はいらぬ」と言われ進学をあきらめて家業をつぎます。当初は同じことを賢治に要求しますが、頭のいい賢治への親ばかぶりは尋常ではありません。

７歳の賢治が赤痢になった時、医者や周囲の反対を押しきり、病室に泊まり込んで寝ずの看病をするのです。賢治へ注ぐ愛情と、やたら賢治に指図したがる政次郎が、ユーモラス。

賢治は学生時代から、詩と童話に才能を発揮しますが、かなり親泣かせでもあったようです。にわかに新興宗教に感化されたり、石で作った人造宝石で事業をはじめたり。家の財産をあてにしての放蕩ぶりにもあきれました。それでも大事な賢治のすることに怒りもせず、できる限りの援助をするのです。

最愛の妹トシが、賢治の一番の理解者でした。病気のトシの部屋に入り浸り、新しい童話を読み聞かせる場面が印象的でした。政次郎にしたら賢治をトシに取られたような寂しさを感じていたようです。教師を辞めた賢治が、童話を書いては新聞に投稿して採用されます。政次郎は嬉しくて何十部もの新聞を買い、近所中に無料で配る姿がほほえましい。

政次郎の目を通して、変わったところがたくさんあった賢治を浮き彫りにした異色の実伝小説でした。

賢治の才能が花開いたのは、父があふれるほどの愛情を注ぎ、何をやっても許されたからだと納得しました。

新聞記者

望月依塑子著　角川新書
８６４円

望月依塑子さんは森友・加計学園問題を取材する東京新聞社会部の記者です。菅官房長官の記者会見で、２３回の質問をしたことで話題になりました。望月さんは一躍、時の人となり他社の記者や自社の応援、多数の読者から多くの激励が集まりました。一方で心ないバッシングにもさらされました。

そんな望月さんは、中学生の頃は舞台女優を夢見て、劇団にも所属していました。しかし、フォトジャーナリストの吉田ルイ子さんの著書「南ア・アパルトヘイト共和国」を読み、目を開かれます。「世界を歩き、社会の矛盾、困っている人たちの生の姿を伝えたい」とジャーナリストを志します。

大学を卒業後、東京新聞の記者になります。初任地の千葉では、警察回りで、事件記者として活躍します。

望月さんを変えたきっかけになったのは２０１４年、「武器輸出三原則」から名前を変えた「防衛装備移転三原則」の一件を経済部の記者として取材したことでした。安倍政権で武器の輸出入が実質的に解禁されたのです。それまで武器とは無関係だった日本企業が世界の武器市場に拡散していくかもしれない。二人の幼い子どもを育てる望月さんは、未来を担う子どもたちのためにも、現状に対して自分の記事を通じて少しでも警鐘を鳴らせればと大企業から中小企業、下請けの会社に至るまで取材を重ねました。門前払いもたびたびだったことを明かしています。それでも屈しない姿がいいです。

何度も質問するのは、事件取材で培いました。大きな声は演劇が役に立ったようです。「だれも聞かないなら、私が聞くしかない」。望月さんの記者としての矜持にどれだけたくさんの人が励まされたかしれません。ジャーナリズムの萎縮が問題になっていますが、「おかしい」と思えば、何度も質問して、真実を追及していただきたい。こんな記者たちがもっと増えれば、政治や社会も変わっていくのだと爽快な気持ちになりました。
今一番の話題の本です。

私のヴァイオリン
前橋汀子回想録

前橋汀子著　早川書房
１６２０円

ヴァイオリニストの前橋汀子さんは、今年で演奏活動が５５周年になりました。クラシックを誰もが、日常生活で楽しんでもらいたいという前橋さんの努力で、低廉な演奏会を各地で開いています。

今年も１０月２９日、札幌キタラ大ホールで、アフタヌーン・コンサートが開かれました。そのころ夫が入院中で、行くのを躊躇しましたが、素晴らしいヴァイオリンを堪能することができました。モーツァルトのヴァイオリン・ソナタの名曲、ドヴォルザークの「スラブ舞曲」、ドビュッシーの「美しい夕暮れ」、ショパンの「ノクターン第２番」などここに書ききれないほどの演奏をされ、アンコールには５曲も。聴衆は大喜びして、ホールは熱気に包まれました。

５５周年を記念して出版されたのが本書です。

５歳から小野アンナ、斎藤秀雄らに学んだのち、中学生の時にロシア語も学び、１９６１年、冷戦下のソ連に１７歳で留学。レニングラード音楽院に入学したのは日本人で初めてでした。ミハイル・ヴァイマンに３年間指導を受けました。ヴァイマンからは弓づかいや指づかいについて徹底的に教えられます。世界中から留学してきた仲間との切磋琢磨した毎日が目に浮かびます。音楽院では演奏だけでなく、体の骨格や筋肉についても学びます。顎にあてて演奏するので筋力がとても大事だというのです。冷戦下のレニングラードでの生活ぶりも興味深く読みました。ソ連での生活に一番多くの紙面を割いているのは、前橋さんの基本を作った場所だからなのでしょう。

その後３年間のニューヨークのジュリアード音楽院、風景が気にいって１０年間スイスを拠点に演奏活動を続けたことやヨーゼフ・シゲティとの交流や教えていただいたこと、名器ストラディヴァリウスとの出会いなどが綴られています。多くの師に恵まれ、ひたむきに努力した日々を綴ります。

小柄なのに、演奏はダイナミックかつ繊細で、私はたった１本のヴァイオリンから奏でられる多彩なメロデイに、いつも驚きと感動を覚えます。

世界的ヴァイオリニストでありながら「私はいまも演奏家という山を登り続けている。頂点は、まだ見えません」と前橋さんの謙虚さにも感銘を受けました。

真ん中の子どもたち

温又柔（オン・ユウジュウ）著
集英社　１４０４円

複数の国の間で自らの生き方を模索する若者たちの姿を描く青春小説です。

台湾人の母と日本人の父との間に日本で育った主人公が中国語を学ぶために上海に留学します。そこで同じように中国、台湾、日本などさまざまなルーツを持つ人たちと出会い、葛藤し成長する姿を、中国語や台湾語を交えて描いています。

両親とも日本に帰化した「元中国人」の青年は「ほんものの、日本人なんか日本中にいっぱいいる。おれたちのほうが、ずっと貴重なんだよ」と言い「どっちにでもなれる」ことを堂々と誇るべきだと諭すのです。

母の、父の、両親の、祖父母の言葉を学ぶために上海で出会った３人は、「ほんものの、ふつうの、完全な日本人ではない」自分たちは、嘆かわしいどころか、喜ばしい存在なのだと笑い合います。

「国籍」とはなにか？「母語」とはなにか？と問いかけます。

著者はこの３人の登場人物は「私の分身だ」と述べています

私たちは複雑な世界に生きています。マイノリティの人々も、移民の人々も、家族のかたちもさまざまです。多様なルーツを持つ人たちは、世界的には「真ん中」だととらえなおした著者の視点にハッとさせられました。線引きに苦しむ人たちが堂々と生きられる世の中になっていますか？と問われたように思いました。

物語　ポーランドの歴史

渡辺克義著　中公新書　８８６円

ドイツやソ連など絶えず周辺国家の侵略や支配にさらされたポーランド。私はアンジェイ・ワイダ監督の「灰とダイヤモンド」「地下水道」「コルチャック先生」「カティンの森」などでポーランドの歴史を知ったつもりでいました。３年前にはアウシュヴィッツ博物館にも行ってきました。

本書はアウシュヴィッツに代表される、ユダヤ人の虐殺やワルシャワ蜂起に見られる抵抗運動など、近現代史を中心に解説されています。過酷な戦争で、常に命を脅かされてきたポーランドの人々。日本はポーランドから学ぶことがあるのではないでしょうか？

関連の本も読んでみたいと思いました。

増補　学び舎
中学歴史教科書

学び舎　２５９２円

子どもたちが歴史を楽しく学べる教科書を作ろうと現職・元職の教師が学習会を重ねて出来たのが本書です。サブタイトルは「ともに学ぶ人間の歴史」。教科書の金額は増補版、本作りの思いを込めた解説本付きです。

自由に考え学びあえる、子どもたちが、自分につながる歴史をつかめる教科書とあるように、おとなが読んでも面白い。私も全部ではありませんがパラパラとめくって読みました。充実しているのはその時代に生きる人々の姿。民衆の声を生きいきと伝えています。その一例が「戦争と二人の少女」の項です。隠れ家で日記を書く少女アンネと、ドイツに抵抗する連絡係のオードリー・ヘップバーンが紹介されていました。私も中学２年の時に「アンネの日記」を読んで自分と同世代の少女が死の恐怖に怯えながら隠れ家生活をしたことを知り、戦争をリアルにとらえることができたように思います。アンネが、世界で起きてる戦争や、差別や偏見に目を開かせてくれたのです。

この教科書には、子どもたちから多様な意見が出てくるような授業、じっくり考え理解を深められる授業をしたいという願いが詰まっています。

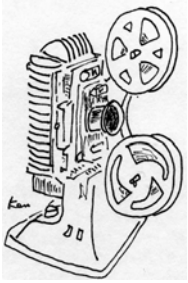
「問い直される戦後」の項目には、資料として慰安婦問題での「河野談話」の要点を 掲載。韓国人の元「慰安婦」、金学順（キムハクスン）さんの名前も記載されています。

こんな教科書で学んだ子どもたちは、歴史が過去のことではなく、未来と地つづきだと真剣に考えるのではないでしょうか？

是非、読者にも読んでいただきたい教科書です。

2017.10月　朝焼け

米軍が最も恐れた男　その名は、カメジロー



佐古忠彦監督

米軍占領下にあった沖縄で、祖国復帰に向けて民衆をリードした瀬長亀次郎の知られざる実像に迫ったドキュメンタリー映画。

カメジローの米軍による蛮行・横暴を断じて許さないという怒り・・。祖国復帰と基地のない沖縄をめざす情熱に沖縄の人々は突き動かされたことを、当時を知る人たちが証言します。「カメジローの演説のある日は、夕飯を早く済ませ家族で出かけた。演説が楽しみでさ」と。演説会を開けば、毎回何万人も集め、人々を熱狂させました。「沖縄の大地は再び戦場となることを拒否する」言葉と情熱で人々の心をわしづかみにしました。人々はカメジローの演説に希望を見たのです。

しかしそんな市民を無視して、米軍はカメジローを市長の座から引きずり下ろしたのです。米軍は那覇市への補助金を打ち切り、銀行預金を封鎖しました。怒った市民は行列を作って市に税金を納めて支援しました。

民衆とともに闘い続けたカメジローの不屈の人生が、たくさんの資料と、ナレーションで浮き彫りにされます。

あの占領下であれだけの民衆が集会に参加した、今につながる不屈の沖縄に原点を見た思いです。

米軍のさまざまな弾圧にも負けず、信念を貫いた生き方に勇気をもらいました。基地を沖縄に押し付けたままでいいのか？自分にやれることはないだろうかと考えさせられました。

翁長雄志知事ら「オール沖縄」の源流を見ました。テーマ曲を坂本龍一が手がけ、大杉漣が語りを担当しています。

上映が終わるとまるでその場にカメジローがいるかのように、万雷の拍手が巻き起こりました。そばにいらしたのかもしれません。

リュミエール

ティエリー・フレモー監督

「映画の父」と称されるリュミエール兄弟（ルイとオーギュスト）は、短編映画１４４２本を制作しました。

今から１２２年前の１８９５年のパリ。リュミエール兄弟は、自ら発明した撮影と映写の機能を持つシネマトグラフによる世界初の有料上映会を開きます。労働者の集団を映した最初の実写「工場の出口」、機関車が客席に突進して来るような錯覚で驚かす「列車の到着」、笑いを誘う「水に撒かれた庭師」などを公開し大評判になります。

リュミエールは、ヨーロッパ、米国、アジア、アフリカと世界中に技師を派遣して、その土地の風景や、生活の撮影を指示し、貴重な映像を残しました。京都で撮られた剣道の試合で明治が蘇ります。

多様な撮影技法は現代の喜劇、ＳＦ、サスペンスやミュージカルなどにも、大きな影響を与え、その先駆性に驚かされました。

ドリーム

セオドア・メルフィ監督

１９６０年代、ソ連との熾烈な宇宙開発競争を繰り広げていたアメリカのＮＡＳＡで優秀な頭脳を持つ３人の黒人女性、キャサリン、ドロシー、メアリーが人種差別の壁と女性であることの二重の差別の壁を突き破ってアポロ計画に貢献した実話の物語です。

この映画が少しも古くないと思うのは、トランプ大統領のアメリカに白人至上主義が復活して、再び差別的な空気があるせいでしょう。

キャサリン（タラジ・Ｐ・ヘンソン）は子どもの頃から数学の才能に恵まれ、ＮＡＳＡに職場を得て、高度な数学能力で重要な役割を担いますが、同僚から不当な差別を受けます。時代の先端を行く職場なのに、黒人女性が使用できるトイレがなく、かなり遠くにある黒人専用のトイレまで走らなければなりませんでした。キャサリンの能力を高く買っているハリソン部長（ケビン・コスナー）は、その理由をキャサリンから聞くと即座にトイレに貼ってある看板をたたき壊すのです。同僚たちが遠巻きに見ている中で、差別の壁を破るのが痛快！

ドロシーは、コンピューターへの卓越した能力を発揮し、黒人女性の計算チームのリーダーになり、メアリーは、当時白人専用だった学校に法的手段に訴えて入学を果たし、宇宙技術者への道を開きました。

高い能力で人種差別を乗り越えていく姿、３人の強い友情も気持ちがいい。１９６０年代のポップでカラフルなファッションやインテリア、ファレル・ウィリアムスの軽快な音楽もステキでした。

３人がひたむきに努力を重ね、自分の人生を切り開いていく姿が颯爽としていて、共感しました。

エルネスト　坂本順治監督・脚本

冒頭のシーンはキューバ革命直後。ゲバラが広島を訪ね、被爆者を病院に見舞います。原爆ドームや資料館にも足を運びます。核の非人道性に怒り、「日本はこんなひどい目に遭わされてどうして怒らないのか」と尋ねる場面が、ゲバラの人間性を伝えていました。

主人公はゲバラではありません。ボリビア出身で父は日本人、母がボリビア人の日系2世のフレディ・前村・ ウルタードは医師を目指してキューバの大学に留学します。心優しくボリビアの貧しい人々に安心して医療を受けさせたいと勉学に励みます。優秀で留学生仲間からも信望が厚いフレディをオダギリジョーが演じました。

フレディはキューバ危機のさなか、誰もが平等に医療と教育が受けられる社会をめざすゲバラの生き方に強く惹かれ、軍事クーデターが起こったボリビアを救いたいと、ゲバラの組織するゲリラ部隊に参加するのです。医学の道を進む中で、ラテンアメリカ解放運動に意義を見出していくフレディの姿は、ゲバラの若き日々と重なります。二人の行動の根底には不正や不平等に対する怒りがありました。でもゲバラもフレディもボリビア内戦で命を落としたことが分からない。無謀としか思えませんでした。

チェ・ゲバラの意志を継いだ日系2世が存在したことをこの映画で初めて知りました。

ゲバラもフレディも、没後５０年。フレディがもし生きていたら７５歳です。素晴らしい医師になっていたと思うと残念でなりません。

標的の島　風（かじ）かたか　三上智恵監督

「標的の村」「戦場ぬ止み」と、沖縄の米軍基地問題を取り上げ続けている三上智恵監督によるドキュメンタリー。

私は昨年初めて辺野古の座り込み集会に参加しました。短い時間でしたが、毎日ゲート前に通い続ける文子おばぁにもお目にかかりました。

沖縄本島では辺野古の新基地建設、高江のオスプレイのヘリパッド建設、そして宮古島、石垣島の自衛隊配備とミサイル基地建設など、さまざまな問題を抱え、反対派の住民たちによる激しい抵抗、警察や機動隊との衝突が続いています。そういった現実を描きながら、歌や踊りの魅力や、豊かな人間性も伝えます。

「風（かじ）かたか」は風よけ、防波堤のことです。映画では一連の沖縄に対する国策を前に、県民の一人ひとりが風かたかになると信じて、行動を起こす姿がリアルに描かれています。

「島のまんなかに自衛隊基地を造るのは自分の心臓をえぐられる思い。戦争を体験した者のひとりとして、いつも無辜の民が犠牲になるのは許せない」と語った宮古島の山里節子さん。喜びや悲しみを即興で歌う「トゥバラーマ」の美しい歌声に涙が出ました。

石垣島では「マラリア地獄」によって多くの人が亡くなりました。日本軍の命令で、発病していない住民６５００人が山奥のマラリア有病地区に強制移住させられ、多く人が犠牲になったことも明らかにします。「軍隊は住民を守らない」ということを確信したと住民は語ります。

沖縄戦の時１５歳だった島袋文子さんは８７歳。毎日ゲートに立ちながら、なぜ、ぶれないのかと尋ねられると、「私は激戦の中を逃げまどった。私がぶれたら死んだ人に申し訳ない。だって死体が浮いて血が混じった水を飲んで生き延びたんだもの。また血の雨を降らすような戦争が起きたら、今度は人間も島も全部なくなる」」と語ります。

三上監督は貴重な発言を丁寧に掬いとり、沖縄の人々の強さがどこから来るのかを伝えて感動しました。

不思議なクニの憲法　松井久子監督

リニューアル版はより憲法が身近に感じられる構成になっています。沖縄の高江や昨年の参院選も加わり生活や人々に近いところから憲法を見つめています。

日常に溢れる沖縄の基地問題と法哲学者の井上達夫氏のインタビューが加わりました。

憲法の成立過程や改正の是非について、主婦や学生、フリーター、憲法学者、弁護士、政治家、文化人などが自身の考えを語り、憲法とは何かを問います。

石川県津幡町にお住まいの水野スウさんは「銀河通信」の長い読者です。「１３条は私が私らしく幸せを追い求めて生きること」「私たちの自由や権利は、不断の努力を普段からすることでやっとこ保たれる」と語りました。文部大臣も務めた赤松良子さんは 第２４条について 「日本の女性は男性と同じ権利になった素晴らしい憲法だと思った。ベアテさんが書いてくれたおかげで、今の私たちの自由と平等があるのです」と語っています。２００１年に私もベアテさんにインタビューさせていただいた日を思い出し、改めて24条の大切さをかみしめました。

「不思議なクニの憲法」は本になりました。映画に登場した方たちの発言がまとめられていて映画と合わせてお薦めです。

婚約者の友人　フランソワ・オゾン監督

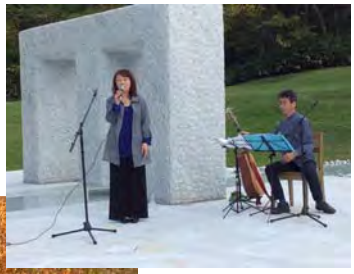
戦争が独仏両国に残した傷跡のなかで、婚約者フランツを亡くしたドイツ人のヒロイン、アンナが絶望、虚無、新たな希望などを経験していく様を、モノクロとカラーを織り混ぜた美しい映像で語ります。

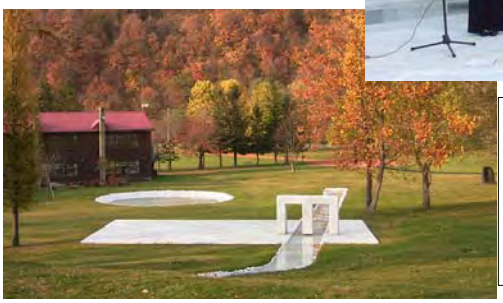
青年が墓の前で涙を拭っている。フランス人のアドリアンはアンナの婚約者と友人だと名乗り、パリでのルーブル美術館のモネの絵の話やヴァイオリンを教えた事を話す。アドリアンがショパンを奏で、知的な風情にアンナが惹かれていくのは自然でした。

フランスにアドリアンを探しに行くシーンとラストはずいぶん昔に観た「ひまわり」を思い出しました。「婚約者の友人」でヒロインを演じたパウラ・ベーアの力強く清い姿が印象に残りました。かつてのフランス映画を思い起こされる懐かしさがありました。

森山軍治郎さんを偲んで

泊原発の廃炉をめざす会の事務局長だった森山軍治郎さんが咽頭がんで亡くなって一年になります。





心を込めて歌う森山章子さんとギターを弾く中村由紀男さん

１０月６日、軍治郎さんを偲ぶ会が「安田侃彫刻美術館 アルテピアッツァ美唄」であり、参加しました 。

軍治郎さんはフランスの民衆史が専門でしたが、常に市民が中心の運動に力を尽くされました。偲ぶ会では軍治郎さんの豪放磊落で、人を包む優しさなどが、参加者から語られました。

軍治郎さんと無二の親友であり、アルテピアッツァ美唄を創った彫刻家の 安田侃さん（イタリアを拠点に活躍）が、強制連行された朝鮮人が美唄炭坑で犠牲になった事に触れ、１９８５年、軍治郎さんが４７３人の過去帳を見つけ、なんとか、韓国に慰霊碑を建てたいと美唄市と交渉。安田さんも協力して実現させたお話に感銘を受けました。

私も８月に、幌加内の朱鞠内で開かれた「東アジアの平和のための共同ワークショップ」に参加したばかりだったので、軍治郎さんとの思いがけない接点に驚きました。

その後、緑豊かな公園に移動して、軍治郎さんの妻、章子さんが、キューバの歌 「ヴェインテ アニョス」と、ライムライトの主題曲「エターナリー」を熱唱。軍治郎さんへ寄せる思いが溢れていて素晴らしかったです。

最後に全員で 「千の風になって」を歌い天国に届けました。

１２月からゆうメール特約の郵送料が１３円値上げになりました。任意の寄付にも頼りながら、今までとおり続けられるところまで発行したいと思います。今年最後の通信です。来年もよろしくご愛読ください。

インフォームドコンセントとセカンドオピニオン

６４歳の夫は１０年前に仕事のストレスから関節リウマチになり、７年前に左肩に人工関節を入れました。そのおかげで公立中学理科教員として定年まで全うできました。その後も再雇用でフルタイムで２年間働きましたが左手の痛みも強くなり完全退職して２年になります。その後は、私がさまざまな活動でいないときには食事の支度をしたり、好きな天体観測を楽しんでいました。

夫が不調に気がついたのは８月だったと言っています。思い当たることがあり通院している内科医に「生物製剤の副作用ではないでしょうか？」と尋ねています。「そんなことはあり得ない」と即座に否定されました。左脇が陥没するほど化膿していました。最初の主治医が転勤で変わったといういきさつがあり、現在の病院に戻ってきたことを知り、外来の看護師さんとも相談の上、元の主治医に変えていただきました。

元の主治医は、すぐに今まで使用していた生物製剤の副作用による人工関節の感染かもしれないと、整形外科に回してくれました。ＣＴを撮り結果を診て、そのまま入院になりました。しかし、以前の手術医とは違う整形外科医からは、４日間ほとんど説明がありませんでした。それから３日後の手術を告げられました。緊急性は分かりましたが、初めての医師であれば、より一層丁寧な説明が必要ではないでしょうか？

夫も私も不安になり、「セカンドオピニオンを受けたい」と担当医に伝えました。「転院は認めない。こんな面倒な手術はどこの病院も引き受けませんよ」とも言われましたが「退院しますので紹介状を書いてほしい」と訴えました。

救急病院の勤医協中央病院を受診し１０月２３日に再入院しました。Ｙ医師から手術とその後の治療について患者の身になって説明していただきました。１ヶ月と長い入院生活でしたが、夫も家族も安心して病気に向き合うことができました。

１１月２４日に退院し、自宅療養しています。

購読料と寄付ををありがとうございます
（敬称略）10.13～11.16

福原正和/中佐藤真理/梅沢俊・節子/中川路朋子/菅野真知子/新妻徹/和田マサコ/清水俊子/齋藤眞依子/高橋儁/黒木沙会子/助田梨枝子

合計26.000円は印刷と送料に使わせていただきます。また高澤光雄さんから著書、梅沢俊さんからはカレンダーをいただきました。合わせてありがとうございます。